

バルトロメ・エステバン・ムリーリヨ

Bartolome Esteban Murillo

(セビーリャ 1617- セビーリャ 1682)

スペインの画家。素描家。終生セビーリャを中心に活躍。主に宗教画を手掛けるが、肖像画家としても卓越した技倆を示す。

スペイン南部の港町セビーリャに理髪師の14人の子どもの末子として生まれる。ムリーリヨという姓は、母方の祖母から。伝記によれば、母方の親類であるファン・デル・カスティージョの元で修業を積む(記録には残っていない)。1645年に結婚、また同年最初の重要な注文である、セビーリャのサン・フランシスコ・エル・グランデ修道院の回廊のための13枚の連作を手掛ける。この作品には、同地の代表画家であったスルバラン(1598-1664)の自然主義と明暗法の影響が顕著である。同時に後にムリーリヨ作品の特徴をなす、優美な女性像や天使たち、静物の細部に見られるリアリズム、世俗と天上世界を融合させた画面などの萌芽が見られる。

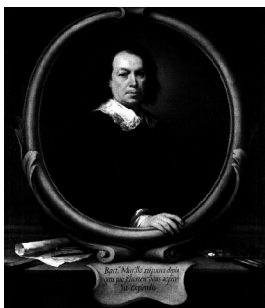
また街角に集う子どもの姿を描いた最も早い例である《蚤を捕る少年》(1645年頃、ルーヴル美術館)などにはベラスケス(1599-1660)の初期風俗画の影響が見て取れる。

1649年から50年にかけてペストの猛威がセビーリャを襲い、同市の人口は激減、経済面だけでなく芸術的文化的側面にも影響を与えたが、ムリーリヨの制作の勢いは衰えず、彼の描く甘美な宗教画はセビーリャの教会を飾った。

1658年にマドリッドに短期滞在し、同地で活躍していたスルバランやベラスケスらと交流を持つ。またマドリッドの王室にあるコレクションに触れ、ヴェネツィア派やルーベンスらの作品から大いに影響を受け、鮮やかな色彩と、バロック美術の醍醐味であるダイナミックな構図を手に入れる。

1658年スルバランがこの地を離れて以降は、ムリーリヨの独壇場となった。《無原罪のお宿り》(1678年頃、ブラド美術館)ほかの図像を確立するとともに、《聖母子像》などに傑作を遺し、同地の対抗宗教改革運動の代表的な画家となる。日常の家庭生活に舞台を取り、優美さや優しさリアリティ、そしてほどよい感傷性を共存させた画風は大いに人気を博した。

1665年から1675年にかけて、貧しい少年たちや町の少女を描いた作品のほとんどが制作される。それらは母国スペインよりも、イギリス、フランスなど国外で評価が高く、後に、ゲインズバラやレノルズ、グルーズらの手本となった。



《自画像》1670-72年

ムリーリヨの住んでいた
サンタ・クルス街

ムリーリヨの家

セビーリャに立つ
ムリーリヨの銅像